

ウォーキング雑感 (その5)



(一社)日本機械土工協会
常務理事 保坂 益男

タクシー乗務員のねぐら

早朝の東京国立博物館前の道路は、タクシー運転手が上野駅(アメ横前)から上野駅公園口前、鶯谷駅、日暮里駅方面にぬける近道として走るほかは、ほとんど車の走ることはありません。陸橋を渡ってすぐの角には立派な公衆トイレがあり、線路に沿って大型バスの駐車場となっており、見物等のため東京へ入ってくる観光バスが何十台も止まっている広大な駐車場があります。公衆トイレがあり、道路が広いわりには車が通らない。またおそらく警察官が駐車違反を取り締まらないためでしょうか、公園生活者のブルーシートの並んでいる車道側には、いつもタクシーが並んでエンジンをかけて(冷房)仮眠をとっております。東京で駐車して仮眠を取れる道路はごく少ないと思います。中には個人タクシーも何台が止まって仮眠をとっております。単細胞の私には会社の車はともかく、個人タクシーは眠くなったら自宅へ帰って寝たほうが良いように思えるのですが。なにか事情があるのでしょうか。

※アメ横一元々は下町の住宅街でした。しかし東京大空襲によって周辺一帯は焦土と化し、第二次世界大戦後はバラック建ての住宅と店舗、そして盛り場では屋台や露天商が目立ち始めるようになりました。これらは公の営業許可を受けないため闇市と呼ばれ、アメ横があるところもその一つでした。配給が十分に行き渡らないため民衆はそこに集まり、それらに群がる愚連隊や暴力団などが入り乱れ白昼の発砲事件なども起き、そ

の度にMP(米陸軍憲兵)と警察が対処に当たるといったような状況が続きました。

1946年(昭和21年)、手を焼いた当局(上野警察署と台東区役所)が近くの実業家・近藤広吉に頼み込み、現在アメ横センタービルの建っている三角地帯に、80軒の商店を収容した「近藤マーケット」を作らせました。その後、マーケットの周辺では中国からの引揚者が露店を出すようになり、現在のアメ横のルーツとなりました。

上野駅は北関東や東北地方、北陸との鉄道の玄関口でした。これらの地方から東京へコマや野菜を売りに来た行商人が、地元では不足していた甘味の飴を仕入れて帰るため、飴屋が並んでいました。上野駅側の「アメヤ横丁」看板は、まだ飴屋が残っていた1950年代に設置されたものであります。

カンカン買い

東京芸大と博物館の間に江戸時代の池田屋敷の表門が移築されておりますが、その前に公園の住民はじめ、台車や自転車に缶を積んだ公園周辺の路上生活者たち3~5人ぐらいの人が、大きなビニール袋(缶収集業者が配付したもの)を2袋位、拾い集めたアルミ缶を持ち寄って集まっております。アルミ缶の買い取り業者を待っているのです。

千葉県内のナンバーがついた2トントラックの買い取り業者が来て秤を下ろすと、公園住民はいつもそばにおいてある石を秤に乗せ、その重さをはかります。おそらく過去に

計量秤に信用できない何かがあったのでしよう。そのため、缶の重量をはかる前に必ず同じ石を秤に乗せて、秤に狂いのないことを自ら確かめてから、ビニール袋を乗せ、缶の重さを量ってもらいます。路上生活者だからといっても同じ人間です。軽く見られたら腹が立つことでしょう。

※池田屋敷の表門—江戸時代、因幡（いなば）・伯耆（ほうき）32万石を治めた大名が、鳥取藩池田家（因州池田家）。徳川家とも姻戚関係にあり、江戸の地でも権勢を振るっていました。上野恩賜公園、東京国立博物館構内に移築現存するのが旧因州池田屋敷表門。東大の赤門（加賀藩・前田家屋敷門）に対して、堂々たる風格から「上野の黒門」と呼ばれています。

芸大生はすごい

住居を出て東京芸大正門前までは歩いて15分ぐらいで着きます。夏バージョンに切り換えた当初の頃の芸大前の朝4時45分ごろはまだ薄暗い中にあります。歩きながら公園側から芸大の正門前をみると、車道と歩道を分けるガードレールの上に熊のようなものが乗っております。驚いて恐る恐る近づく、なんとガードレールを支える直径15cmもないような支柱の頭に、髪を垂らした若い女性（おそらく芸大生）が乗って座禅を組んでいるんです。支柱の頭と女性との関係はどうなっているだろうか。なぜ落ちないで座禅が組めるのでしょうか。ふしぎな光景でした。薄暗いところで想定外のこの光景はチョット気持ちが悪いが、早朝ガードレールの上での座禅、“芸大生はすごい”。

芸大は構内に寮があるのかどうか判りませんが、催しが近くなると毎日朝5時前後なのに、何人もの学生が集合して、校舎と道路の間にある敷地内にブルーシートで屋根や囲いを作り、裸電球の下で「大作」の造形物を制作しています。大学生は「朝寝坊」との概念がありましたが、芸能、芸術に秀でた大学生は徹夜、朝起きは平気なのか。これまた“芸大生はすごい”。

※東京藝術大学—東京藝術大学は、国立学校設置法の公布施行により、東京美術学校

（現在の美術学部）、東京音楽学校（現在の音楽学部）を包括して、昭和24年5月に設置されました。現在は美術学部、音楽学部の2学部14学科と、附属図書館、大学美術館、演奏芸術センター等の施設で構成されています。



上野公園のイチョウ

上野駅の鶯谷駅よりの陸橋を渡り終わると、右側に上野寛永寺・輪王殿があり、その手前の末寺が続く横町の奥に入っていくと徳川家と思われる、周りを塀で囲まれた大きな立派な墓所が何カ所かあります。この一帯は広い谷中霊園に続いており、新しいウオーキングコースを開拓しようと薄暗い中を墓地の中の道をたどっていくと、墓地で公園生活者が寝ており、ギョツとしたことがあります。上野の山は寛永寺と上野東照宮が建っているお蔭で江戸時代から徳川家によって保護されていただけあって、公園の所々に幕末の上野戦争を耐え抜いたような太い幹回りの木が生えております。東京国立博物館をすぎてすぐに太い幹から乳房を幾本も垂らした見事なイチョウの木が歩道の真ん中に立っております。おそらく道路を作るときに、あまりに立派なイチョウの木なので伐採することが出来なかったのでしょう。

歩道はその木の両脇を歩けるように作られております。この木は、お蔭で、芽吹きから実なりまで毎日真正面から見ることになり、季節の映りを知らせてくれるありがたい存在の木です。

※寛永寺—寛永寺は、寛永二年（1625）慈眼大師天海大僧正（じげんだいしてんかいだいそうじょう）によって創建されました。

寛永寺の山主には、後水尾天皇の第三皇子守澄（しゅちょう）法親王（輪王寺宮）を戴き、江戸時代には格式と規模において我が国随一の大寺院となったのですが、幕末の上野戦争により、敷地の大部分が上野公園となりました。